

母の 646 ひろば

doshinsha / haha no hiroba



こどものメイゲン② 2
わたしの原風景①/西村繁男 3
「だれのこどももころさせない」ためにできること
/西郷南海子 4
新刊紹介/赤羽茂乃、村上勉 6
茅野由紀、大西紀子 7

イラスト/木野聡子

オーレリアンの庭

今森光彦

昨年NHKのテレビで「オーレリアンの庭」と題してアトリエの庭を紹介してくれました。それ以来、折にふれて庭のことを尋ねられるようになりました。アトリエの庭づくりは、早いもので30年以上つづいています。ここで言う庭は、皆さんが想像されるガーデニングのようなスタイルとはちょっと違います。簡単に言うとミニ里山でしょうか。とにかく周辺の田園風景のなかに溶けこむような庭がほしかったのです。それもただ外観が似ているだけでなく、生態系のなかにほんとうに組みこまれている庭です。

私がこんなにも里山の再生にこだわっているのは、写真家として40年近く琵琶湖周辺の田園を撮影するなかで、日に日に姿を消してゆく風景に出会ってきたからです。クワガタムシがたくさんみられた雑木林が造成のためになくなったり、田んぼの整備によってイモリがいた側溝がコンクリートでおおわれたりしました。こんな例をあげるときりがありません。風景は、永遠のものだと思っていたのですがいとも簡単になくなってしまった事を知りました。姿を消す生きものは絶滅危惧種と言われますが、風景にも絶滅危惧という言葉があてはまります。写真を撮るうちに、しだいに里山への危機感が高まり、もし土地が手に入ったら絶対に里山空間をつくってやろうと思ったのです。

アトリエの庭は、おおまかに雑木林、畑、ため池からなっています。これらの環境は、里山の3要素。森としての雑木林、草原としての畑、水辺としてのため池、どれも重要なアイテムです。それぞれ違った性質の環境を隣り合わせにすることによって生物の多様性が高められます。こうした場所は、エコトーンと呼ばれ昔から自然愛好家には知られていました。実際に、私も数々のエコトーンを発見し、長年フィールドワークをしてきました。

庭のレイアウトができてからは、植物の植栽に努めました。ただ、すべて植えたのではなく、半分以上は、鳥の糞といっしょに植物の種子が運ばれて芽吹いたものです。庭づくりは生きものとの共同作業でもあります。

現在、アトリエでみられる生きものはたいへん多く、蝶だけで70種類をこえます。オーレリアンとは、ラテン語に由来する蝶を愛する人のこと。まさに名前にふさわしい庭になってきたようです。

(いまもり みつひこ/写真家・ナチュラルリスト)



こどものメイケン

■ トイレでおしっこができたとき

—— すごい！ かっこいいね。

「ちがうの。かっこいいじゃなくて
かわいいがいいの！」

はっとする子どもの一言を、シチュエーションを添えて、お寄せください。氏名・住所・電話番号・お子さんのお名前と年齢・お子さんのお名前の掲載の可否を明記のうえ、童心の会(P8)まで。掲載させていただいた方には絵本を1冊プレゼントいたします。

わたしの原風景

1

西村繁男

にしむら しげお／絵本作家



私を剥いでいけば、少年時代の私が確かに今もあって、老人になればなおさらこの少年時代が顔をもたけてくる。そして懐かしさを感じるより、それが私の資質そのものを形作ったのだと再確認することになる。私は団塊の世代で、昭和三十年代が少年時代である。戦争が終わり日本が高度成長に向かった時期だ。舗装されていない土の道があり、あちこちに原っぱがあった。物は豊かではなかったけれど、まだ管理されない大らかで自由な空気があった。

私の故郷は高知である。小学校のクラスの集合写真を見れば、私の顔はお盆のように真ん丸である。太陽が眩しくていつも顔をしかめている。背は小さく一番前が二番目であった。他の子より幼くぼやっとしていたようだ。絵を描くことは好きだったけれど、運動や遊びは下手だった。それでもぼやっとしていたから、思春期を迎えるまで自分の下手なことをすら気にならず過ごした。

私の家は高知市内を流れる鏡川の堤の上にあった。川と川原、川辺の畑と対岸の田んぼは格好の遊び場だった。釣りも下手で上手く釣れずにいた時、いじめっ子がやってきて竿を取り上げられたことがあった。いじめっ子は、次々魚を釣り上げ、ジャバジャバと川に戻して行ってしまった。それ以来、私は金網製のフツタイという道具で魚を捕ることに夢中になった。捕ってきた魚はバケツで飼うのだが翌朝にはいつも死んでいた。酸素が足りないことに頭が回らず、同じことを何度も繰り返した。泳げるようになったのも遅くて、魚を捕りに行って、頭を水につけ足を上げて力を抜いたらまたま浮いたのだった。セミや蝶など虫取りも上手とは言えないけれどよくやった。田んぼでは強がって蛇を振り回したりもした。自然以外では少年漫画雑誌と東映のチャンバラ映画があった。杉浦茂さんの漫画に出てくる雲は私の絵本にも出てくる。

そこには大人にあまり干渉されない子どもだけの世界があった。そんな時代に少年時代を送れたのは幸せであったとしみじみ思う。

「この人なんて言ってるの？」——新聞の二面に載っている安倍首相の写真を見て、こどもたちが聞いてきました。三人の子育てで毎日バタバタ。特に朝はこどもたちを保育園と小学校に送り出すので精一杯で、朝刊を広げる余裕もありません。そうして読めないままの新聞が「積ん読」となって、テーブルを占拠してい

「だれの

こどもも

ころさせない」

ために

できること

西郷南海子

さいごう みなこ / 安保関連法に反対するママの会発起人。四歳、七歳、十歳のこどものママ。

きます。その中から首相の写真を見つけたのが、我が家のこどもたちでした。



ちょうどその頃（二〇一五年の初夏）国会では、安保関連法案の審議が進められていました。テレビでは連日、首相の答弁の様子がニュースで流され、こどもたちも気になっていたのでしょう。しか



イラスト／本野聡子

しわたしは、こどもたちからの質問にくぐに答えられない自分に動揺しました。安保関連法案というのは、自衛隊の活動制限を取り払い、部隊への給油など米軍のさまざまな下支えができるようになるという内容でした。米軍が行ってきたこれまでの戦争を振りかえると、わたしは自衛隊にそういう活動をしてほしいとは思えませんでした。しかも日本の憲法には、「国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」と書いてあります。つまり、これ

は国と国との間にもめぐることが起これたら、戦争や武力以外の方法で解決するという約束、それも「永久」の約束というように読めます。そうあってほしいと願ってきたわたしは単純すぎるのでしょうか。

わたしはすべての人を納得させられるような「模範回答」を持ち合わせていません。でも、こどもを授かり、産み、育てる中で、人ひとりが大人になるというのがこんなにも大変なことなのだとこのことを知りました。そうして大きくなったこどもたちが、国の命令で殺し合いをさせられるとしたら？ わたしは何のためにこどもを育てたことになるのでしょうか。政治家たちがどんな大義名分を振りかざしたとしても、現場での戦闘を担うのは結局「だれかのこども」と「だれかのこども」です。



その思いに至ったとき、その立場、その目線から、いまの政治に対して意見を言おうと決め、二〇一五年夏に「安保関連法に反対するママの会」を立ち上げました。だれにも相談せず、ただ一人top dogと呼びかけたのですが、「わたしも何かやりたかった！」という各地のママたちともすいスピードで合流しま



だれのこどもも
ころさせない
西郷南海子・浜田桂子
かもがわ出版

した。そして彼女たちとメッセージのやりとりを重ねる中から「だれのこどももころさせない」の合言葉が生まれました。そしてひと月もたたないうちに、安保法制に反対する二〇〇〇人の「ママの渋谷ジャック」を成功させることができたのです。いまでは北海道から沖縄にまでネットワークが広がっています。それぞれこどもがいてバタバタの生活ですが、その中でも、命が大切にされる政治を作っていくという気持ちで、SNSを通じてゆるやかにつながっています。一人一人のママたちと互いに距離は離れているけれど、気持ちはつながっている、というのはちょっとした宝物のように思います。



わたしは仕事でアメリカに行くことがあるのですが、街を歩いていると、ホー

ムレスの若者にたくさん出会います。歩道の片隅で毛布にくるまり、寄付の小銭を集めるための紙コップを置いています。中にはダンボールに手書きで「軍隊をやめました」と書いている人もいます。イラクやアフガニスタンに送られた米軍の若者たちは、極限状態で日々を過ごし、心や体に大きな傷を負って帰ってきます。戦闘の悲惨な記憶に苦しめられ、仕事や日常生活を営むことができず、ホームレスになる場合も多いと言います。冷たい道路にうずくまる彼女らの前を通りながら、なぜ彼ら彼女らはここにいないればならないのだろうと、考えずにはいられません。そして、その場で寄付をすることが必要だとは思いつつも、もし誰か一人に寄付をすれば、街角で別のホームレスの若者に出会ったときに「彼には寄付しないのか？」という葛藤が生まれることに気づき、悩んだ結果、前回のアメリカ滞在中誰にも寄付をすることができませんでした。

その場で寄付するということも、もちろんひとつの解決策です。でも、わたしはこれだけモノにあふれた「豊かな」社会で、今日の生活に困っている人がいる、ということを、もっともっとオープンに話し合っていきたいのです。そして、軍事には当然のように税金が使われる一方

で、教育や福祉には「お金がない」とされてしまふ政治のあり方を問い直していきたいです。これは、どの国で生きる人にも共通の課題だと思えます。



わたしは「軍事」や「防衛」の専門家ではありません。でも、たとえ専門家でなくても、命の現場、生活の現場から物を見て考えることはできます。「だれかのこども」と「だれかのこども」が殺し合いをさせられるようなことは、もう終わりにしたい。それを終わりにしていくきっかけは、どこか遠くではなくて、わたしたちの暮らしの中にこそあるとわたしは思っています。たとえば、わたしたちが買い物をするときに、納めなければならぬ消費税。これが本当に正しく使われているのか、だれかを傷つけるようなものに使われていないか、チェックすることができます。その使われ方に疑問や不満があれば、国会議員に会いに行つて意見を伝えることができます。

世の中を変えていく方法は、それだけではありません。今日わたしたちが「何を話すか」ということもまた大きな力になります。政治の話をする、意見の違いや立場の違いがわかってしまうので気

まずくなるし、避けたいというのが、今の日本の雰囲気だと思います。でもその「気まずさ」を乗り越えていきたいとわたしは思っています。まず話さなければ、問題が「ある」ことにもなりません。それに、たとえ立場の違いが明らかになつたとしても、一人一人ができるだけ幸せに生きていきたいという願いはみな同じだと思っからです。そのことを忘れずに、ていねいに話し合い、一緒にできることを探していくのなら、それはすでに立派な「草の根」です。

安倍首相は二〇二〇年には憲法を変えたいことを言っています。もしそうならば国会で改憲案が出され、最終的には国民投票にかけられることとなりますが、主権者はあくまでもわたしたちです。政治家がやると言っているからそうなるものだ、と任せるのではなく、決めるのはわたしたちなのです。そのためにはまずわたしたちがどういう暮らしをしていきたいか、そのために何が必要なのかという話を自由に話し合えるようになるのが先ではないでしょうか。もう少し暖かくなつたら、わたしはこんなふうに生きていきたい、だから世の中のごんなどころを変えたいということ、ママたちとピクニックしながら、語り合いたいと思っています。

かみなりさまのごろべえは、何しろおへそが大好き。真っ赤な体にお洒落なパンツ、恰好いいベルトには、へそ入れ袋をぶら下げて、さあ、準備万端出発だ。太鼓たたきはロボットに任せて、ハンドル付きの雲に乗り、おいしそうなおへそを探して縦横無尽に飛びまわる。どう見ても、栓抜きにしか見えない家の宝のへそ取り機。「くりんくりんの シュー すっぽーん」ネズミに力士、クジラにカエル？ へそを取るたび、おかしい音が飛び出す、吹き出す。さてさて、いただいたおへそを一杯食べて、お腹の膨れたごろべえは、自分のへそも「くりんくりん」ととっちゃった。「ぽっこん ちよっぽん シャー」はたしてごろべえの運命は……。

この『へそとりごろべえ』は、幼い頃から落語や紙芝居を見て育った、江戸っ子赤羽末吉ならではのユーモア溢れる創作詩絵本です。へそ取り機は、まさに赤羽自身が晩酌のビールの栓を抜こうとして思いついたアイデアですし、どこか間の抜けた感じのするへそは、好んで描いた題材です。自身「へそを取られる時、偉そうなやつが一番情けない音をしている」と語っていますが、そのような、江戸っ子らしい屈託のない風刺精神も、おもしろさを膨らませています。表紙を開けば、そこには、のびのびと飛び回る、ごろべえの巻き起こす風が、ダイナミックに吹き渡っているのです。

(あかば しげの／赤羽末吉三男・研三の妻、赤羽末吉研究家)



へそとりごろべえ
赤羽末吉／詩・画
本体価格 1400円+税

おれはおへそが
だいすきだ

赤羽茂乃

「短くするのは大変だよ！」

村上勉



かぜにもらったゆめ
佐藤さとる／詩
村上勉／画
本体価格 1400円+税

佐藤さんとコンビを組んで本作りをはじめたのは、私が19歳の時でした。「コロボックル物語シリーズ」『おばあさんのひこうき』『おおきなきがほしい』など、コンビの仕事が10年過ぎても、私の仕事はいつも挿絵ばかり。

佐藤さんの書かれるファンタジーには、どうしてもリアリズムに徹した挿絵を要求されるのですが、30歳を過ぎた私は、佐藤流ファンタジーからはみ出した遊び、絵本がやりたくなったのでした。『おばあさんのひこうき』も『おおきなきがほしい』も、絵本のように、絵本でない。原稿枚数は、5、60枚は越え、これでは絵本になりません。

その頃から佐藤さんに絵本の原稿を依頼していたのですが、書きはじめると、完璧主義の佐藤さん、4、5枚では物足りないようで、いつも、7、80枚の中編になってしまうのでした。

佐藤さんには絵本原稿は無理なんだ、と、すっかりあきらめていた頃でした。「トムさん（私のあだ名）、変なもの書いちゃったよ！」と、渡してくれたのが、この『かぜにもらったゆめ』だったのでした。

どうやら、この詩を書く前に、佐藤さんの郷里、横浜の小学校の校歌の作詞で苦しんだそうで、この絵本原稿は、楽しんで、トントン、トントンと書かれたようでした。

(むらかみ つとむ／挿絵画家)

大切なことが きゅつと詰まった絵本。



きょう、おともだちが
できたの

得田之久／作
種村有希子／絵
本体価格 1300円+税

この絵本の主人公、おとなしいゆうなちゃんにお友だちができました。心躍りながら帰宅した夜の気持ち——「早く明日にならないかな」という待ち遠しさと「明日も遊んでくれるかな」と心に忍び寄る不安とで揺れる気持ち——が、語りすぎない文と、子どもの頬の柔らかさまで捉えている絵とで、とても丁寧に表現されていて、見事な絵本です。「今」を全力で生きる子どもが「明日」の心配をする。明日を思う体験は、とても大切な心の成長なのだと思いました。

このお話の中には、子どもにとって大切なことが散りばめられているようです。他人の「いいところ」を見つけること。同じように自分にもいいところがあることを見つめること。気持ちを真っすぐに表現すること。思い切って挑戦すること。そしてそれが報われるという安心感。そして何より、子どもはこの本の絵を見ながら、大人たち（だけでなく、お月さまや道端のお花だって！）が、そっと傍らで温かく子どもを見守っていることに気付くでしょう。

友だちができるというのは、子どもにとって大した事柄だと思います。これから新入園・入学・進級の時期。優しさがにじみ出るようなこんな本を、店頭においておすすめしたいなと思います。

(ちの ゆき／ブックハウスカフェ店長)

茅野由紀

「くまさんの だいこうぶつ の あかくて おおきい くだものは なにかな？」との問いかけに、くまさんのいるページの下段をめくれば、切ったリンゴが並びます。「しゃき しゃき りんご いただきます」と大喜びのくまさん。うさちゃんとねこちゃんの大好物には、野菜と魚を挟んだサンドイッチが出てきて「いただきます」。三つ子の子ぶたちちゃんたちは、ほかほかシチューを「いただきます」。

画面の真ん中が下段と上段に交互に分かれるしかけで、ページの下には料理が現れ、上段には嬉しそうな「いただきます」のお顔が出てきます。小型の絵本ですが、鮮やかな色づかいと、すっきりした絵柄が愛らしく、読み聞かせると、1、2歳児さんは、興味津々で絵を見つめて笑います。どんな食べ物が出てくるかあてっこして大喜びの3、4歳児さんは、ページごとの繰り返しの「いただきます」を声に出し、一緒に食べるしぐさをします。年齢にあった反応が見られて、幅広く読みあいを楽しめます。1場面が上下に分かれるしかけも斬新で、シンプルな展開ですが、子どもたちから「もういっぱい」の声しきりです。最後にみんなで食べられる大きなホットケーキの登場も効果的。「いただきます」の声が次第に広がって、子どもたちは笑顔いっぱい、みんなで一緒においしい気分が味わえる絵本です。 (おおにし のりこ／「この本だいすきの会」絵本研究部世話人)



いただきます

新井洋行／さく
本体価格 1200円+税

みんなで一緒においしい気分

大西紀子

3月の新刊図書!

メッセージ 手塚治虫からの伝言 (全5巻)

- 友情
- ロボットと暮らす世界
- 平和への祈り
- 命
- 人間の未来

手塚治虫 / 著
中野晴行 / 監修

本体価格 各1980円+税
セット価格 9900円+税



手塚作品には常に読者である子どもへの視点があります。悲劇的な未来や人間の愚かさを描いたとしても、子どもたちの未来には希望を抱き続け、それが創作活動を支える源泉ともなっていました。テーマごとに魅力的な作品を集め、「未来の地球人」たる子どもたちへ、手塚治虫のメッセージを伝えるシリーズです。

報道報道カメラマンの課外授業 いっしょに考えよう、戦争のこと (全4巻)

- 1 戦争はどう報道されたのか
- 2 沖縄・戦いはいまでも続いている
- 3 ベトナム・未来へ語り継ぐ戦争
- 4 命^{めち}どう宝 戦争はなぜ起こるのか

石川文洋 / 写真・文
茅野市立北部中学校 / 協力

本体価格 各2800円+税
セット価格 11200円+税



報道カメラマン・石川文洋さんが取材した、ベトナム戦争をはじめとした、さまざまな戦争。その実態を、写真を通して子どもたちに語りかける平和の授業。戦争の実態を伝えることを通じてはじめて、平和の大切さ、命の尊さがわかる。今だからこそ伝えたい大切なことは「命どう宝」。生きていればこそ。

2018年3月15日発行 (毎月刊)
母のひろば 第646号
定価50円 (年600円 / 送料とも)
発行所: 童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話03(5976)4402
編集発行人: 大熊裕
童心社のホームページ:
<https://www.doshinsha.co.jp/>
フォーマットデザイン: bise inc.

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌(無料)と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。購読料金は1年分600円(送料とも)。



あとがき

●「蠢動」という字そのままに春になると虫が動きだします。やはり生き物である私も、身体の内側でわけもなく生命力がざわめきだすのを感じます。何か大きな仕事を成し遂げたいという野望も、ざわめきだす季節のようです。辞書で【蠢動】を引くと、「つまらないものが騒ぎ動くこと」ともありましたが、せいぜい騒ぎ動いていきたいと思っています。◎

●子どもに「かわいい」と言う時は、その子の姿や性質の愛らしさを伝える以上に、あなたが愛しい、という思いを込めているものです。子どもも分かっているようで、「〇〇ちゃんは、ママ、かわいいよ」と言ったりします。近年、世界に日本のKawaii文化が広まっているようですが、まず「I love you」の代わりに言葉なんです」と伝えたい気もします。▲